

—目 次—

- 1 検査当夜 002
- 2 スライム風呂 050
- 3 乳兄弟と愛馬と 067
- 4 幕間 117
- 5 《花の儀》——玉座の間にて 128

※この作品はフィクションです。

実在の人物や団体などとは関係ありません。

とうとうこの日が来てしまった。

皇帝マクシミリアンは夜の回廊でひとりため息をついた。

もはやこの国で自分を悩ますものなど何もない、そう思っていた。数週間前までは――

(すべて、あの男が原因だ……っ)

あの眼鏡をかけた穏やかな容貌に騙されたと言っている。

医務官ロイド・フォートナム。

今年二十五歳を迎えたマクシミリアンより三つ年下の青年だが、外見とはかけ離れた押しが強さでも有名な男だった。

奴の言い分はこうだ。

——陛下は御年二十五歳とされましたが、いまだ妃を迎えておりません。となれば今後の帝国発展のためにもいま一度、例の検査を実施させて頂きたい。

二十五にもなつて妃を迎えてこられなかったのは、この広大な国土で常に反乱が起きていたからだ。

マクシミリアンが物心ついた頃には、皇帝の権威が弱りきつていて、兵力や富は全て地方の大貴族が牛耳っていた。

気弱な少年であれば、ゆつくりと弱つていく国を見て見ぬふりもできただろう。だがマクシミリアンは生まれつきの反逆児であつた。

こちらが黙つていればどんどん増長し、果ては皇族に敬意も払わない地方貴族どもを野放しにはできなかつた。

——これは私の生涯をかけて、根絶やしにしなければならぬ敵だ……！

その一心で奴らを罠にかけ、使える者は生かし、操り、ともに戦つてきた。

その道中で亡くした者は数え切れない。それでもようやくかつての威光を取り戻

すことはできた。

まだ国内で小競り合いが起きることはあるが、十年前と比べたら驚くほど少なくなっている。

こうやって帝都から少し離れた夏の離宮で余暇を過ごせるようになったのも、ここ数年のことだ。

以前は離宮にさえ仕事を持ち込み、部下から身体を休めるようにと良く嘆願されたものだ。その数も減り、今ではこうして離宮の中庭に造られた噴水を見て、涼を楽しむこともできる。

ちょうどマクシミリアンが立っている回廊から、噴水がぶわりと勢いを増すのが見えた。

（どうせ妃は一人と言わず二人、三人と娶ることになるだろうに、なぜあんな『検査』を……！）

頭に思い浮かべるのも腹立たしい言葉がよみがえる。

——精子検査。

それがロイドの提案してきた検査の名称だった。

妃を迎える前に皇帝の子種が機能しているか調べるものらしい。詳細を聞くのも腹立たしい。

だが帝国が国教に定めたビリジアン教では、いにしえより子種を残すことが至高とされている。

そのため男や女が子を作れるかどうか必ず検査をする習わしがあった。

マクシミリアンは帝国の動乱を治めるため、この十年まったく検査を受けてこなかった。

ロイドの言葉にも一理ある。

だが、だからといって、あんな………！

思い出すのも厭わしい、子供の頃受けた検査の数々に頬が熱くなる。

(ツ……あんな、恥ずかしいものをどうして今になって………！)

他人の指で性器を何度もしごかれ、白い子種汁を噴き出させられた。

射精は一回では済まず、二回、三回と続き、性器が萎えると尻の穴にまで指を入れられて、勃起させられた。

性への目覚めが薄い子ども頃だったからこそ受け入れられた。だが成人を迎え、セックスの知識もそれなりにある今となっては屈辱としか思えなかった。

それに検査を行うのはあのロイドだ。

部下に、しかも同じ男に身を任せるなど、恥ずかしいことこの上ない。

(……私が恥ずかしいと考えるから恥ずかしくなるのだ。今夜のは単なる医療検査……医療検査だ！)

マクシミリアンは胸いっぱい息を吸い込むと、意を決してロイドが待つ己の寝室に向かった。

大股で歩くたび、金色の前髪が揺れる。今夜のために羽織った薄手のナイトガウンは瞳の色と同じ深いブルー。

中庭には夜になると月光を花びらにため込んで、白く輝く月光花が咲き誇っていて、足元は明るい。

内心の屈辱を押し隠して、優雅な足どりで進むと寢室の前に立つ衛兵たちが敬礼した。

「医務官は？」

「部屋でご準備なさっておられます」

用意周到なことだ。

舌打ちしたくなる気持ちを押さえて、マクシミリアンは苦虫を噛みつぶす顔で衛兵に命じた。

「我が寢室の前から去れ。なんびとも寄せ付けるな」

「しかし陛下、それでは警備が手薄に……！」

「私が良いと言っているのだ。人払いをせよ」

付き合いの長い衛兵だからこそ、今夜の音を聞かれない。

扉は分厚く、万が一にも音が漏れることはないはずだが、彼らの耳に届かない保証もなかった。

自分のあられもない声を聞かせる相手くらい選びたい。

「これは命令だ」

キツク言えば彼らは渋々といった様子で部屋から遠ざかっていった。

それを見送ってから寝室に入った。

「あれ？ 思ったよりも早かったですねえ」

間延まのびした声が届く。

ロイドはベッドサイドに怪しい薬瓶をいくつも並べていた。使い道の分からぬ道具も置かれている。

「奥手な陛下のことですから、お部屋にいらっしやるまでもっと時間がかかると思っていましたよ」

安っぽい挑発だ。

こんなもの真に受ける方がどうかしている。

「ふん。たかだか検査一つ、なぜ私が臆する必要がある」

ずかずかと大股で天蓋ベッドに近づき、腰を下ろした。

夏離宮の寝室らしく天蓋から垂れ下がる布は目にも涼やかなロイヤルブルーの薄絹だった。

窓辺からそよぐ夜風にはためく景色が美しい。

窓の向こうは広い堀があるため、聞こえてくるのは木々の葉擦れはずと眠たげなフクロウの鳴き声ばかりだった。

灯りと呼べるものはベッドサイドに置かれた燭台一つきりで、淡いオレンジの光がロイドの横顔を照らしていた。

内心の緊張を悟られぬよう、ナイトガウンのベルトを外すと、ロイドが声をかけ

てきた。

「ああ、座られたまま大きく股をひらいて下さい」

言われたとおりで大股びらきで座りなおしたが、ロイドの予想とは違ったらしい。

「全然足りませんよ」

ぐいっと大きく開かされ、膝に置かれた手がゆっくりと股間に伸びる。

「ッ……!」

「ほくら。マクシミリアン陛下のおちんちんを見せてもらいましょうね」

ガウンの中に着ていた寝間着のズボンを下着ごと引きずり下ろされる。

ぼろん、と萎えた性器が躍り出た。ロイドが眼鏡をかけ直して、じっとそれを見

つめてくる。

「ふうむ。形は悪くない。欲をいえばもう少し太さと長さが欲しいですね」

つう、と医務官らしい細い指が竿をなぞる。体温の高いマクシミリアンと比べる

とロイドの指はひんやりと冷たかった。

「色つやもすばらしい。あまり使い込まれていらっしやらないという噂は事実なのですね」

「…、……貴様は黙って仕事が進められないのか……っ」

文句をたれると、反撃するかのように生暖かい息を亀頭に吹きかけられた。

「——ヒッ——?!?」

「お静かに。陛下も衛兵にお声を聞かれたくはないでしょう?」

「……ふん、生憎あいにくと人払いはもう済ませてある」

「どうだ参ったか! と、生来の気性よろしく反論すると、ロイドと今夜初めて目が合った。」

「明るいハシバミ色の瞳がじつと下から自分を観察してくる。」

「研究家肌らしい強い視線に、今まで一度も臆したことのないマクシミリアンが気圧されていた。」

部屋に入ってからずっとひた隠しにしてきた緊張や屈辱、羞恥がバレてしまう。そんな気さえした。

「ふふ。では本日ご用意した検査項目を全て満たせそうですね」
にっこりとほほ笑む笑顔に、マクシミリアンは今すぐ部屋から逃げ出したくなっ
た。

だが皇帝としてのプライドがそれを許さない。

勇気を振り絞って尋ねた。

「その検査項目とはいくつつあるんだ？」

ロイドはマクシミリアンの性器を両手で弄びながら、答えた。

「うーんそうですね。まず射精の速度、時間、切れの良さといった基礎項目に、持
続時間、前立腺の反応具合などを用意した道具で調べます。前立腺を刺激する道具
は各種サイズをかなり取り揃えてありますので、きっと陛下がお気に召すものがあ
ると思いますよ」

すらすらと答えるロイドの言葉にマクシミリアンは質問した自分をすでに絞め殺したい気分だった。

「す、全ての項目を満たす必要はないであろう……?」

「おやあ? 皇帝陛下ともあろうお方が国の教えに反するのですか?」

ぺたぺたとロイドの指が竿に触れては、小さなシワをめぐろうとしてくる。

「ツ……………そうではない、が……………!」

「ご安心ください。このロイド・フォートナム、陛下の玉体を傷つけることは絶対にありません」

(そういうことを聞いてるのではない……!)

「では早速、検査を始めましょう」

閉じかけた両足を再び強引に開かされ、体温の低い指に睾丸を優しく揉まれる。

マクシミリアンに否と言う権利はもうなかった。

◆
(ああ〜！ 医務官になって十年。待ち続けた甲斐があった……！)

ロイドは丁重にマクシミリアンの竿を全ての指で包み込むと、その太さ、少しくねった形、薄紅色の美しい色あい、さらには竿の裏筋にほんのりとできた小じわまで、全てを目でしゃぶり尽くすように堪能した。

そうしてゆっくりと視線を下げて、皇帝陛下のおちんちんの下にぶらさがる玉を指の腹でちよん、と持ち上げる。

「っ……っ！」

マクシミリアンの息を飲む音が聞こえるが、すぐに途絶えた。

決して敵に臆するような気配を見せないところが、またそそられる。

プライドの高さも一級品なら、この美貌も素晴らしい。

けぶるような金髪に、変幻自在に色を変えるサファイアをはめこんだような瞳、

女のように白くすべらかな玉の肌、そのくせ戦場で鍛え上げられた均整の取れた体つきが異様な色香をかもし出している。

女など選びたい放題だと言うのに、当の本人は自分の外見に一切の価値を見いだしていない。

というのも幼い頃から荒みきった宮廷で生き抜いて来たものだから、己の外見を大層褒める者が実は裏で次期皇帝暗殺を巡らせていたことが、彼が成人するまでに何度も起きていた。

以来、彼は世辞や追従ついでしょうというものを一切信用していない。

それもあってか、自分の美貌に吸い寄せられる女たちを苦手としていた。

(その歳で童貞なのも、ちゃんと知っていますからね)

皇帝陛下が女を抱いたなら医務官にすぐ連絡がいく。

しかしマクシミリアンが皇帝となつてからまだ一度もその報告はない。

皇太子時代にもなかった。

つまり完全なる未経験である。

(皇帝陛下のイイところ、全部見つけて、僕が開発してあげますからね)
にんまりと笑みを深くして、マクシミリアンのおちんちんに鼻を近づける。

「——ア……何をしている貴様……！」

「何って嗅いでいるんですよ。陛下のおちんちん。ちゃんと綺麗に洗ってるんですね。イヤな匂い一つしない」

クンクン、とこれみよがしに鼻を揺らすと、マクシミリアンの耳まで赤くなっていた。

(うわ……本当によく反応をされる)

もっといじめたくなるじゃないか。

ロイドはそのままマクシミリアンの亀頭にだ液を垂らした。透明な唾液が薄紅色の亀頭をゆつくりと濡らしていく。

「——ッ♡」

「液体への感度良好。では次に——」

れる、と長い舌をこれみよがしに伸ばして、マクシミリアンの竿を根元から先っほに向かつて舐めた。

「あ、ア、あ……それ、やめよ……!」

「ダメですよ。全ての検査項目をやり遂げるんですから。ほら、陛下のおちんちん、バッキバキに硬くなりましたね?」

指摘した通り、マクシミリアンのおちんちんは完全に勃起し、固くそそりたって
いた。

といつてもロイドの竿と比べたら、可愛らしいサイズだ。

手のなかでむくむくと形を変えるマクシミリアンのおちんちんが一層愛らしく思えて、ロイドはそのまま口に咥えこんだ。

「やつ、なぜそんなことを、する……ッ……! あ……ア、口で、そんな……ッ♡

しゃぶるんじゃ、ない……っ♡」

マクシミリアンの声に艶やかなものが混じり始める。

それを耳で楽しみながら、ロイドは根元まで啜えこんだ。

舌先で笠をつつくと、嬉しそうに亀頭から先走りを漏らす。両手をマクシミリアンの足の付け根に添えて、大股びらきをさせる。

じゅぽじゅぽっ♡じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

器用に喉まで使って激しくしごとく、竿がどくどくと脈打つ。

(もうちょっとか……)

冷静に観察しながら、マクシミリアンがイキそうになる瞬間、口を離した。

びゅくくッ♡♡

可愛らしい音を立てて精液が飛び散る。

「あー駄目ですよ。もっと飛ばさなくては」

竿を持って、ダメ押しの如く手でしごとく。

「ほーら、シュツシュ♡ シュツシュ♡ 飛ばしっこしましょうね」
精液を一滴残らず出せと言わんばかりに玉を揉みこんでやると、再びマクシミリアンが精液を噴射した。

「やア——ツ♡ ア、や、あ……………もお、出したくな——いいいい♡♡」
ロイドはマクシミリアンの耳元に口を寄せた。

「陛下の嘘つき。おちんちんは出したくてたまらないって言ってますよ。今までたくさん我慢されてたんでしょ？ 全部出していいんですよ。ほら、あのお皿に精液が全部溜まるまで出し切りましょうね」

ロイドの背後——床に置いていた深皿にちょうどマクシミリアンの精液が飛び込むように角度と位置を調整する。

ぴちゃぴちゃ♡ちやぷん——ちよろろ♡♡

マクシミリアンにとっては恥ずかしいことこの上ない水音が夜の寝室に響き渡る。

「やだっ、やっ！ もお、むり……………！ 聞きたくな……………い、いい♡」

「えー？ 気持ちいい、のいいですよ？ 今のは」

極めつけとばかりにマクシミリアンの笠を親指と人差し指で作った輪っかでグリグリといじめる。

竿はまだ脈づいてて、出せると言っている。

精液が残りどのくらいかなど、ロイドには全てお見通しだ。

「金玉がカラになるまで出して頂かないと。それとも皇帝陛下のおちんちんはこの程度なんですか？ 玉なしと評価しなくちゃいけませんね」

「っ！」

口で煽ると、キツく睨まれたが怖くもなんともない。

一番の答えはロイドの手の中にあるのだから。

「ほら、女に種付けする勢いでもっと頑張ってください」

「ツ……っ♡ ……ア、ああああ♡♡」

ちよろろ、ろろ♡♡

最後の一滴が深い皿に入り込み、マクシミリアンのおちんちんが力をなくしていく。

「これが『皇帝陛下』の射精です。しっかり身体に覚えさせてくださいね」
そこでロイドは言葉を切った。

マクシミリアンがふしぎそうに目で続きを促してくる。

その柔らかな耳たぶにロイドは決して忘れさせぬよう、毒をそそぎ込む。

「まあ、男の手でこんな簡単にあっけなく射精されては、まだまだ皇帝の射精とは呼べません。陛下にはもっとお勉強して頂かないと、ね？」

マクシミリアンの美しいかんばせ顔に困惑と恐怖とが浮かぶ。

その一連の反応をロイドは目に焼きつけた。

あの戦場では鬼神のごとき青年が、今や自分の手の中にある。

しかもどんな身体に仕立てるかにはロイドの思いのままだ。

(凄く敏感に仕上げるのがいいかな。僕の手に触れられたらすぐ勃起しちゃうよな……ほかの男に反応するような身体にはしたくない。この分だと腰や尻を撫でまわされるのも慣れてないから、まずはお尻の割れ目に僕のを塗りつけて、ちんちんを挟むのに慣れてもらおうってのも良いなあ)

アイデアがどんどん湧き出てくる。

それを支えてくれる道具は全て用意してあるのだ。

ロイドはベッドに腰かけるマクシミリアンをそのまま押し倒した。

「では、陛下もお洋服をぬぎぬぎしましうね」

「え、あ、待てっ！」

制止の声は聞こえないふりをして、寝間着のズボンを全て下着ごと足から引き抜く。青いナイトガウンが白いシートを敷きつめたベッドに鮮やかな色を添える。

上着のボタンを一つずつ外していくと、バランスの取れた美しい肢体が目に見え、飛び込んできた。

他人に肌を許すなど今までの人生で一度もなかったのだろう。

マクシミリアンが胸元を己の手で隠す。

「駄目ですよ。陛下。今夜は全て見せて頂かないと」

「う、うるさい！ 胸は今夜のことには関係ないだろう」

妙に意固地になっている。これは胸元に何かあるなとロイドは踏んだ。

「もしや医務官に見せられないような胸なのですか？ ではほかの医務官にも申し送りしておかなくてはなりませんね」

「ッ！！」

「それが嫌でしたら僕に見せて頂けませんか？」

完全に逃げ道を塞ぐ。

どちらに転んでもマクシミリアンには耐え難い屈辱であろう。だがこういう時、人はどちらがより増しな結果か考える生き物だ。

宮内にはロイドの他に数十人の医務官がいる。彼ら全員に知られるのと、ロイ

ドひとり知られることを比べたら、結果は言うまでもない。

「……分かった………………。その、胸のことは他言するなよ」

ゆっくりとマクシミリアンの手がどき、その胸元があらわになる。

厚い胸板にはきつと薄紅の乳輪に乳首があるはず——だった。

そこにあったのは薄ピンクの乳輪にほっかりと埋まった乳首だった。

先っぽが完全に埋もれている。

(——陥没乳首………………!)

思わぬ出逢いにロイドは興奮を抑えきれなかった。

息が自然と荒くなる。

「おい、ロイド………………?」

不安げに問いかけるマクシミリアンをよそに、ロイドは乳輪に埋もれたソコを指先でツンツンとつついた。

「ッ! おい、貴様、胸は関係ないと言っただろう?!」

「いいえ、皇帝陛下の乳首が陥没しているとあっては、これを出す方法を考えなくてはなりません」

まじめな顔して、強引に彼の陥没乳首をいじくりまわす説明をつける。

「そ、そういうもの、なのか……？」

「もちろんですとも！」

「ッ、勝手に顔を近づけるな………」

マクシミリアンはしばらく考え込んだのち、問いかけてきた。

「それはこの検査にも必要あること……なのか？」

「はい！」

「な、ならば仕方ない。さわることを許す。だが、この事は絶対に他言無用だぞ。分かっていいるのか？」

「ええ、他の者には申しません。陛下と僕だけの秘密です」

赤くなった顔をマクシミリアンは片手で隠しながら、今夜初めてその顔をほころ

ばせた。

まるで年の離れた弟を可愛がるような視線だった。なんだか見ているこちらも誇らしくなる。

「貴様と私だけの秘密、か。良いだろう。許す」

だが彼が己の選択を後悔するのに、さほど時間はかからなかった。



れろれろ♡ちゅぽんっ♡

乳輪を舌でしゃぶりつくすと、夜目にも薄紅色の乳輪が唾液でてらてらと光っていた。その中にぷっくりと沈んでまだ顔を出さない乳首は持ち主同様、頑固者だった。

「ふーん、この程度じゃ出てきませんか。やっぱり指でいじって差しあげるしかあ

りませんね」

乳首のうもれた乳輪を指でつまみあげると、小さな穴の中でうねる乳首が見え隠れする。

「っ……そう、か……」

マクシミリアンは顔を赤くしたまま、相変わらず声を抑えている。それがまたうぶくて、ロイドの欲をそそられる。

自分でもよく我慢できていると思えた。

股間はマクシミリアンの痴態を見て、完全に下着の中で勃起している。

我慢汁も出ていて、下着がじつとりと濡れているのが分かった。

(いや、まだまだこれからだ。もつと陛下の身体に悦びを教えて差し上げなければ)

ロイドは名案を思いついたとばかりに乳輪をぱくりとしゃぶると、きつく吸い上げた。

ず、ぢゅるるる♡♡

すると乳首の先っぽが姿を現した。

(やった！ 一つ出てきた)

喜びにうち震えながら、今度は前歯で乳首をくわえて器用にひっぱり出す。

にゅぷぷぷ♡ぷぷつ♡

口の中で姿を現した乳首を今度はざらついた舌で思う存分しゃぶり、吸い付き、ねじふせる。

フル勃起した乳首はぷっくりとふくらんで、長い指の腹で押し倒し甲斐があった。

「やっ……ねじり回すな……このっ……ッ♡」

「いいじゃないですか。陛下の乳首がお外に出てこれたお祝いですよ」

唾液まみれの勃起乳首をマクシミリアンに見せつける。そのまま顔を出した勃起乳首の感触を指で触って楽しみながら、残った陥没乳首に取り掛かる。

「もういいっ！ あとは私がやる……っ」

マクシミリアンが起き上がろうとするが、のしかかっているこちらが優勢だ。しかも膝で射精したばかりの股間を膝でグリグリ押せば途端にマクシミリアンの勢いもそがれる。

「こっちはスライムを使って出してあげますね♡」

ベッド脇に置かれたガラス瓶を取り出し、瓶の中身をそのまま陥没乳首に垂らす。薄青い粘性の液体——その正体はスライムだ。

スライムは穴を見つけるとほじくり出そうとする習性がある。この場合の穴は陥没乳首だった。

うねうねと動く正体不明の液体にマクシミリアンの腰が震えるのが伝わってきた。

「いけません陛下。皇帝ともあろううお方が敵前逃亡など」

枕元へ逃げる体に馬乗りになって、動きを止める。

「スライムに陛下の陥没乳首をほじくりだしてもらいましょうね」

「——スライムなど、そんな下等な魔物を国の医務官が使うなど……許されぬこと

だぞ」

「陛下が知らないだけで、医務官と言わず庶民の間でも夜のお供にスライムはよく使われるんですよ。ほうら、陛下の陥没乳首引きずり出されていくのがよく見えるでしょ?」

ちゅぽんっ♡♡

半透明な液体のなかで姿を現した乳首にスライムが吸い付く。そのまま乳首の穴までほじくろうとし始めた。

「おやおや。スライムに気に入られたみたいですね。陛下の勃起乳首。おいしそうにおしゃぶりされてますよ」

マクシミリアンが手でスライムをどけようとしたので、ロイドは彼のむきだしのへそに自分のおちんちんをこすりつけた。

「ッ!?!」

「ふふ。凄いでしょう。陛下が僕の手で達するところを見たいで、こんなに反応

しちゃいました。見せてあげますね」

ズボンをゆるめ、下着から勃起したちんちんを取り出した。そのまま我慢汁が垂れているところの先っぽをマクシミリアンのへその穴にくつつける。

「やめよ！ そんな汚らわしいモノ、私の体に近づけるな！」

「なぜですか？ 同じ男なんだから恥ずかしがらなくていいんですよ」

ぬち♡ぬちぬちっ♡くちゅ、ちゅう♡

「あれ？ この穴小さいなあ。全然入り切らないや。でも陛下には一度、本物の男の射精を見せておかないといけませんから、このまま出しますね♡」

「なにを馬鹿なことを……そんなへそになど、出せるわけが……ンん……ッ♡」

いつの間にかスライムがもう片方の胸に触手を伸ばして、勃起乳首を吸い上げていた。

両方の乳首をスライムにしゃぶりつかれて、マクシミリアンの両脚がガクガクと震えている。

感じている証拠だ。

「スライムと身体の相性が宜しいみたいですね。じゃあ見せであげますよ。僕の本気汁」

マクシミリアンの身体の両側に手をつき、腰を浮かす。そのまま猛然と臍の穴に亀頭をこすりつけた。

浅い穴だ。時おりマクシミリアンの腹筋につるんとすべり込む。

戦場暮らしが長かった皇帝の身体にぜい肉はひとつもなかった。

鍛え上げられた肉体はどこもかしこも敏感で、振り返るとマクシミリアンのちんちんが立ち上がり始めているのが見えた。

(必死に立ち上がろうとして……かくわいい♡)

そのままマクシミリアンのへそ穴めがけて、何度も先っぽを滑らせた。

「ほら、目かっぽじて見ててください。これがっ！ 男の、射精ですっ！」

にゅぷ——ビュルルルル♡♡♡

盛大な音を立てて、へそ穴に精液を流し込む。浅い穴はすぐに満たされ、行き場を失った精液が盛り上がり、亀頭が白い海におぼれる。

背後でマクシミリアンの足がじたばたともがくが、もう遅い。

猛然とこちらを睨みつけてくる皇帝の視線は、ロイドの征服欲を満たしてくれた。「いいですね。その反抗的なお顔。でも今は、こちらを見ていただかないと……！」

ぐ——にゅぶるん♡♡

射精し続ける竿を持ち上げ、そのままマクシミリアンの鍛え上げた腹筋を白く汚した。

それはむせ返るほどの匂いを寝室に放ち、ロイドは腹筋から垂れる精液を手にとると、マクシミリアンの勃起乳首に塗りつけた。

(お?)

塗りつけた瞬間、わずかにマクシミリアンの下半身が頼りなげに揺れた。

これは素質がある。

口には出さぬまま、スライムとともに勃起乳首を押しつぶす。

「皇帝陛下にはもっと快楽への耐性をつけて頂かないといけませんね」
ふてぶてしい笑みを浮かべたまま、まだこの宴が終わらぬことを宣言した。



なぜ皇帝たる私がこんな屈辱的な格好をせねばならない！

マクシミリアンは内心ほぞを噛んだ。

検査であればあの最初の射精で終わったはずだ。それなのにこの男は屈辱ばかり与えてくる。

さっきの……へその穴への射精だって——！

思い出すだけで顔が火照る。性体験のない自分でも、アレが特殊な方法なのは分かっていた。しかもロイドの性器ときたら、自分の子どもみたいなモノと比べたら

大人サイズだ。

たっぷりとした重量に使い込まれて黒ずんだ竿、ほんの少し左曲がり、竿の裏側には凶悪な筋が浮かんでいた。

それにあの量。

自分が最初に出した精液とは比べ物にならないほど大量だった。すぐにへその穴を埋めつくし、残った精液は腹筋に引っかけられた。

(あんな……まるでおしっこをかけられるような……やり方……！)

しかも陥没した乳首を無理やり両方とも引きずり出され、終いには奴の出した精液を塗りつけられる始末。

もう我慢ならなかった。

例え国教で定められた検査であっても、これはおかしい。

だが異を唱えようにも、この部屋には今自分とロイドしかいない。冷静な判断をくだせる者はおらず、人払いを済ませてしまったせいで、衛兵を呼びつけることも

できない。

全てが裏目に出ていた。

(しかもこの格好……ッ)

今、マクシミリアンは仰向けのまま股を開かされていた。両足はロイドの肩に持ち上げられ、アソコが丸見えの状態だった。

「へえ。やはり陛下の体はすみずみまで綺麗ですね。アナルの入口も瑞々しくて、綺麗です」

そんな場所を綺麗と言われても嬉しくもなんともない。

(さっさと終わらせろ)

目で訴えている意味を理解できない男ではないというのに、彼はことごとく無視してくる。

「まずは陛下のおちんちんに元気になってもらわないと」

ロイドがベッド脇から何かを持ち出す。

今度は透明な真珠みたいなものが詰まったガラス瓶だった。

「これもスライムの亜種で、前立腺にくっつけるとちゅーちゅー吸い始めるものなんですよ。夫婦の夜のお供によく使われる一品で男性が——」

「御託はいいから、さっさと始めろ！」

これ以上長ったらしい説明を聞く気にはなれなかった。

ロイドは言葉を中断させられても嫌な顔ひとつせず、真珠とほぼ大ききさの変わらないそれを尻の穴——アナルに入れ込んだ。

「んっ！」

冷たいものが逆流してくる感触に妙なもどかしさを覚えた瞬間、それはツルツルと体内をまさぐり、そじょう遡上した。

「やっ……ンん——ア、あ、あ♡♡」

初めての体験に体をもじもじと揺らすが、マクシミリアンが身体を揺らした分だ

け、ソレは奥へと入り込んだ。

ぱくんッ♡——ヂュウウウ♡♡

急激に体の一部にとりつくつくと、そこをきつく吸い上げてきた。ちょうど性器の根元の裏側あたりにピタリと張りつく。

キツく吸われる度、萎えていたおちんちんがムクムクと起き上がり、反応し始める。

(まさか、まさか……これは——)

真珠スライムの思わぬ効果にマクシミリアンはロイドの説明を聞かなかった己を悔やんだ。

そこへ頭上からロイドの言葉が降ってくる。

「じゃあ、どんどん入れていきますね♡」

ニッコリと微笑む顔は全てこのことを予期していたと言わんばかりの憎たらしい笑顔で、マクシミリアンは恥も外聞も捨てて怒鳴った。

「貴様、私を謀たばかったな！」

「謀たばかただなんて、お人が悪い……。陛下が早く始めろとせつついたんじゃありませんか。お陰でどんどん気持ちよくなっていくのが分かるでしょう？　ほうら二個と言わず三個入れちゃいましょうね♡」

「やめっ——!?」

つぶつぶ♡♡にちにちっ♡

アナルから入れられた真珠スライムは最初の一個目に喜んで取りついた。

「数を増やすとお互いに溶け合って大きくなるんです。前立腺を全部おおえるサイズになったら、ここからが本番ですよ」

言うなりつぶつくりとふくらんだ前立腺に真珠スライムが全方位から吸い付いてきた。

「いやアアア——！　……やめろ……今すぐ……やめろお……ッ♡♡」

数分前のことを思い出させられる。

陥没乳首を舌でしゃぶられ、吸い出させられた時間。あれが今度は下半身全体にいきわたるようになつたようなものだつた。

小刻みに前立腺を揺らされ、ねっとりとした液体にむしゃぶりがつかる。吸うだけだと思つていたら、今度は四方八方から前立腺の形が変わるほどこねくり回される。

ぴゅーっ♡♡

愛らしい音を立てて、自分のおちんちんから透明な精液が漏れる。

(だめ……だ。こんな、出し方……くうッ!!)

必死に声を我慢しようとしても、前立腺に取り付いたスライムはそのタイミングを見計らつたように、いじめてくる。

腰が何度も浮き沈みし、両脚が痙攣けいれんする。

前立腺をいじめ抜かれて、ぶるんぶるんと竿を揺らしながら、少量の精液を飛ばすおちんちんが、ロイドにじっと見られていることに気づいた。

「あ……ッ……やだっ、足から手を離せ……っ」

「嫌ですよ。こんな特等席から離れるだなんて。大丈夫。陛下のおちんちんがぶるぶる揺れてても、僕は気にしませんよ」

「私が気にすると言って——?!」

瞬間、真珠スライムが今までで一番キツく前立腺を蹴ってきた。

「いやああアアアア!! 見るなっ。見るなっ!」

ロイドがアナルに顔を近づける。

「イキたいんでしょう? 構いませんよ。僕しか見ていませんから」

熱で曇った眼鏡が反射して彼がいまどんな喜色をその目に浮かべているのか分からない。

ふうーっと、生あたたかい息を吹きかけられ、指先で揺れる裏筋をなぞり上げら

れた。

「やっ！ ダメ、イク！ ……♡ イツちゃう！！！」

びゅくくく♡♡♡

はげ
烈しい音を立てて第二の射精をぶちまける。その気持ちよさに腰から溶けていくような快楽を味わされた。

(これ、は……頭が……変になるっ♡)

「ふむ、色と量、それに切れも問題ない。なかなかイイ射精でしたよ。皇帝陛下♡」

「ッ！」

唐突に己がこの国を統べる統治者であることを思い出させられて、羞恥心が体内に浸透し始める。

一国を率いる自分が、たかだかスライム風情にあんなに乱れ、その様子を医務官のロイドに全て見られた。

到底、許容できるものではなかった。

「もうこれで十分であろう！ 離れよ！」

ロイドの身体を押し返そうとすると、意外と強い力で引っぱられた。

「何を仰っているんです？ 全ての検査項目を満たすにはまだ色々残ってますよ。例えば……」

そこでロイドが体を近づけて、スライムを入れられたアナルに熱く、固いものを添えてきた。

「っ」

「陛下の前立腺は人間のオスに攻められた時どんな反応をするか、とかね」

あれほど精液を出したはずなのに、ロイドの性器ははつきりと力を取り戻していた。

完全に勃起した竿が、大股開きさせられた尻の割れ目に当たる。

「——ッ」

その熱量に思わず息を飲む。

「では陛下の処女、頂きますね」

すかさずロイドの肉棒が体内に入ってきた。

ずろろろろ♡♡

ゆっくりと亀頭だけをはめこんだまま、ゆるやかに前後に動かされる。

(アア、……男のモノが私の身体を出入りするなど、きもち悪いっ……)

「いいですね。陛下のお口。とてもキツキツで可愛らしい。肉ひだがきゆうきゆう締め付けてくるのが分かりますよ。でもねほら、僕の亀頭にくっつかれると喜んで陛下のひだひだがゆるむの、分かるでしょう？」

——分かりたくもない！

そう思うのにロイドは動きを止めず、じっくりと焦らすように引き抜こうとする。

「おや。入り口でひっかかってしまいましたね。陛下も僕のおちんちんを欲しがってこれていると解釈しても宜しいのでしょうか？ ほら」

ぱちゅ♡ぱちゅ♡

空気を孕んだまま、入り口で抜けずにとどまる亀頭の音を聞かされ、耳を塞ぎたくなる。

「ふふ。どこもかしこも可愛いですねえ。陛下の身体」

へその穴に残っていたロイドの精液を陰毛に塗り付けられ、腰が浮く。そのゆるんだ隙を突いて、ロイドの性器が竿まで入ってきた。

「あ……………くう…………ツ」

「声、我慢しなくてもいいですよ。僕しか聞いていませんから！」

ど——ちゅん!!

根元まで入り込んだ竿は的確に前立腺を突いてきた。

「——ア、……………はア……………ツ♡」

ロイドの性器に起こされたかのように再びスライムたちが動きを再開する。

さつきはスライムだけだった。けれど今度はスライムにロイドの肉棒まで加わっ

ている。

どちゅん♡どちゅん♡どちゅん♡♡

猛烈なピストンとともにスライムの責め苦が合わさって、もう性器を勃起させることも追いつかない。

それでも快楽は絶えず生まれてきて、射精をせっついてくる。最後の一滴までふりしぼれ、と……。

「待て………もお、出せな………ツ♡」

「大丈夫。射精できなくても、メスイキならできますからね」
メスイキ………？

そんなやり方は知らない。

だが身体は快楽の放出先をとくに定めていた。萎えた性器の先っぽに熱が集まり、肌が高ぶる。

「やっ、何か……クル！ ……やめ、やめろおおおオ！！」

びゅくん♡ビュルルル♡♡

精液は一滴も出ていない。

けれど体内で確かに射精する音が鳴り響いていた。まるで楽器を鳴らすみたいにとめどなく音が噴き出して、やまない。

(いやだ……こんなの経験したくない……ッ♡♡)

極めつけとばかりにロイドの肉棒が前立腺に押し込まれ、グリグリと亀頭ごとスライムを塗りつけてきた。

スライムが激しく収縮を繰り返し、そこへロイドの肉棒がくつつけられた。(うそ……なんでまだ硬いんだ……?)

身体をずり上げて逃げようとしたが、ロイドに足を抑え込まれる。

結合部からにちゃりと粘着質な音が響いた。

「ではいきますね。皇帝陛下」

その言葉とともに体内でロイドの射精が開始された。

ビュルルルルル♡♡♡♡

ぷっくりとふくらんだ前立腺に烈しく精液を吹きつけられ、その熱さに目が眩んだ。

何度も、何度もしつこく熱い液体を噴き出され、また自分の体内で射精する音だけが鳴った。

「ツ♡　っ♡　ア♡　くっ、うゝゝツ♡♡♡♡」

もはや悲鳴じみた声しか出せなかった。そのまま熱い快樂の波に溺れ、ロイドの精液を受け止め続ける羽目になった。

ようやく射精が終わった頃には、マクシミリアンの体は疲れ果て、指一本動かすことはできなかった。

「おやおや。ここで眠られてはあとが大変ですよ。陛下。せめて入浴されてから眠りませんと」

にゅぽお♡♡

竿の引き抜かれる音が響くと、目の前にロイドが座り込んで肩を揺らしてくる。視界に射精を終えて満足しきった竿がシートにどさりと乗っかる。亀頭からは残り汁が出ていて、色の濃い竿はヌラヌラと濡れていた。

(アレがさっきまで私のナカに……………ッ♡)

考えただけでまた腰が揺れてしまう。

もう一度あの全身が痺れるような快楽を体験したい。

ゴクリと唾を飲み込んだ瞬間、己の浅ましさに気がついた。

(……………私は、いま何を考えて……………いた?)

「ご安心ください。皇帝陛下専用の浴場にもちゃんと陛下を満足させられるものを準備しておきましたから」

まるでこちらの欲望を見越したような言葉にギョツとさせられる。

「メスイキはしっかりと身体に覚え込ませてからが本番ですよ」

ロイドの囁い声が寝室に響きわたった。

目が覚めた時には浴場の柱に背中を預けるように、座っていた。白い湯気が浴槽からたちのぼって、ゆっくりとこちらに流れてくる。

ロイドは浴槽の前に腰を下ろし、なにやら湯の温度を測っていた。

どうやって連れてこられたのかも覚えていない。

浴室は寝室を出て数分歩いた先にある。人払いは済ませてあったから、誰かに自分の姿を見られたとは思わないが、記憶がないのは何となく不安だった。

広い浴室は全面白いタイル貼りで、天井には魔力光をため込んだ明かり取りが設置されている。

淡い蛍火のような光が白いタイルと合わさって、優美な雰囲気醸し出している。皇帝の身体を冷やさぬよう、浴室は常に温かい空気が循環しており、一糸まとわ

ぬ姿であっても寒さを感じない。

(あやつは一体なにをして……)

床に手をついて身体を起こそうとすると、尻の穴からどろりとした液体が流れ出てくる。

「ッ!!」

すぐに両足を閉じたが、尻穴から漏れた液体は止まらずトロトロと漏れ続け、タイルを穢した。

「ああ、気が付かれましたか。調子はどうですか？ マクシミリアン陛下」
浴槽からこちらに振り向いたロイドの顔をきつく睨みつける。

「最悪に決まっている……!」

「またまたあ。そんな怖い顔をなさっていたら綺麗な顔が台無しですよ」

綺麗な顔と言われるのは更に嫌だった。幼い頃そう言って近づいてきた者たちが皆、どいつもこいつも父や母を貶め、弟たちに暗殺の手を伸ばしていたから余計に。

世辞や追従はろくでもない毒だとマクシミリアンは知っていた。

だから自分の顔の美しさなどに興味はなかったし、いまだにそう言って近づいてくるものは一切信用しなかった。

(この男もそうなのか……?)

疑問をあらわにしながら睨み返すと、ロイドがへらりと笑った。

「ははは。相変わらず顔を褒められるのはお嫌いですか。でも——」

ロイドが眼鏡をかけなおした。湯気で曇って、眼鏡の奥にある瞳が読めない。

「御身の持つ可能性をもつと陛下はお知りになった方が良いでしょう」

言うなりロイドの背後にある浴槽から大きな湯柱が上がった。うねうねとくねる

ソレは巨大なスライムを彷彿ほうふつとさせられる。

(まさかこの男、湯殿にスライムを仕込んで——)

腰を上げて逃げようとした時にはうねる湯柱に身体を捕えられていた。

そのまま湯船に引きずり込まれる。

逃れようとすると、湯に取り込まれたスライムの圧力で引き戻される。湯船のへりまであと数センチなのに、その距離が遠い。

「大丈夫。怖くないですよ。そのスライムはすごく繊細で、陛下の穴という穴をすみずみまで綺麗にしてくれるんですから。例えばそう、僕が出した精液とか」
言うなり尻の穴にスライムの細い管がいくつも入り込んできた。

ぢゅうううううう♡♡

股から漏れだしていた精液をあつという間に吸い込んでいく。

痛みはなく、ただ生あたたかい触手が出入りする感触にマクシミリアンは耐えるしかなかった。

(やっ……ああッ♡ ……………こんなの、気持ちよくななどな……!)

「ほうらお前たち。陛下のアナルを隅々まで綺麗にして差し上げるんだよ」

ロイドの命じるままに触手が湯の中で蠢き、肉ひだのひとつひとつにまで吸い付

く。

まるでいくつもの小さな舌に舐めとられる感触に、また体内に熱が集まる。

(もお、これ以上奥に……、……入って、くるなっ……！)

足でスライムと化した湯を蹴っても全く効果はなかった。

両手を触手に持ち上げられて拘束される。顔だけは息継ぎできるようにふさがれなかったが、体内の肉ひだをじっくりと吸い尽くされ、しゃぶられた状態では声を我慢する方がつらかった。

「良いですねえ。すごく良い。やっぱりマクシミリアンはスライムと相性が良い。ほら、僕にもマクシミリアンの穴をよく見せて」

ロイドの命じるままスライムは浴槽全体から盛り上がった。ロイドの目の高さに合わせて、スライムに脚を開かされる。

ぐぽっ♡ぐぽっ♡♡

細い触手にアナルをこれでもかと広げられ、ロイドの前であらわにさせられる。

恥ずかしさで憤死したくなった。

(やめ——！)

細い触手がアナルの肉ひだをつまみあげる。まるで主あるじにどれだけ綺麗にできたか報告するように。

「まだ奥に残ってる精液、かき出してごらん」

少し太い触手が入り込んできてナカを探る。その形は先程初めて体験したロイドの竿に似ていて、いやでも身体が期待してしまう。

(駄目だ！ 駄目……なのに！)

触手はグングンと中に入り込み、前立腺よりも奥にぶちまけられた液体をゆっくりと丁寧にかきだした。

「へえ。陛下のアナル、かきだしてほしくないってばかりに、肉ひだがピクピク痙攣してますね。これはまたぶつとるのが欲しくなってるのかな。意外と皇帝陛下も

好きモノなんですわねえ。こういうコトが」

下卑た笑みを浮かべるロイドに怒鳴った。

「黙れ！ 全て貴様が始めたこと、で——っ♡♡♡♡♡」

にゆるん♡ぐちゅちゅう♡♡♡♡♡

精液をかきだしていた竿が一転して、中へと入りこんでくる。さっきまでへにゃへにゃで柔らかかった触手はあつという間に硬くなり、きれいになった肉ひだを蹂躪する。

(や、ア♡ 深い……しッ、硬くて、おっきい♡ こんな、入ってきたら……腰、とまらな……ッ♡)

「おやあ、どうしました？ 陛下、まさかスライムの触手にお尻の動きを合わせてます？ みだらに腰をくねらせて、娼婦みたいな動きをなさってますよ。これでは皇帝陛下ならぬ淫帝陛下ですわねえ」

「だ、まれ……この、下衆めえ……ッ」

「その口ごたえどこまで見れるか楽しみですねえ。ほらお前たち。もつと陛下を満足させてあげなさい。陛下の唇から可愛らしい悲鳴が上がるまで」

その命令とともに触手が一気に全身に襲いかかってきた。

勃起乳首を両方吸われ、乳首の穴までなめらかな触手にほじられ、吸い付かれる。さらには太くて硬い竿で勃起した乳首を上向かされたり、押しつぶされる。

両脇には熱い肉棒をすべりこまされ、それをギョツと挟みこまされた。脇の隙間から亀頭を模した触手が何度も出入りし、マクシミリアンの視界を汚す。

^{へそ}臍の穴にも細い触手ははわされ、赤ん坊のように吸いつかれた。

尻を人間の手に形を変えた触手で執拗に揉まれ、軽く叩かれる。その振動が体内に伝わって、猛スピードで出入りする肉棒を通常よりもきつく締め上げてしまう。背筋にも太い触手をつきつけられ、なぞりあげられる。手首を拘束された指には体内を出入りする触手と全く同じ太さのモノを握りこまされ、触覚だけでなく視覚

からも理解させられる。

自分が今ナニに蹂躪されているのか——

「……いやああ……アア……アア……ア♡♡ もお、分かったか……らっ♡♡ 止めよ！」

「まだまだ可愛らしいには遠いなあ。こうなったらスライムに種付けしてもらいましょうか？」

「やっ！ ナカは………！ ナカは………嫌っ！」

「嫌？ あんなに種付けされて悦んでいたのに？ それはありえないなあ。大丈夫。きつと皇帝陛下なら耐えられますよ。そうだなあ、まずは抜かすの二発いってみようか」

無慈悲な宣告に主に忠実な巨大スライムが応えた。

——どちゅん♡どちゅん♡どちゅん♡どちゅん♡どちゅん！！

グリグリと前立腺に亀頭をこすりつけられながら、出入りする竿が徐々に太くなっていく。マクシミリアンの身体から抜けないように根元がふくらむ。

それはまるで犬の交尾で見た竿の形とそっくりだった。長時間種付けするために相手の身体から抜けないよう、根元を膨らませるのだ。そうするとメスはいくら離れようともがいても抜けない。

いまマクシミリアンの体内を蠢く触手竿も全く同じだった。

（いやだ………本当に種付け………される………！ 人間以外の生き物に子種汁をかけられてしまう！）

男だから妊娠する可能性はない。

けれどどうも男としての自尊心を奪われた状態で種付けされるということは、何か自分の中で決定的な変化が生まれてしまう予感があった。

それは恐怖とも不安ともつかない未知への畏れだった。

「はい、一回目♡」

ロイドの宣言とともに、温かい液体が吹きつけられる。

肉ひだのひとつひとつまでも白く塗りつぶされる。精液を噴き出し続ける亀頭がひだひだの隙間にまで塗り込められ、仕舞いにはコツコツと腹の裏側をこづいてくる。

——びゅくくくく♡♡

出続ける精液をまんべんなく塗りたくられ、その感触にマクシミリアンは無意識に快楽を感じていた。

(嫌♡♡ こんな、魔物の種付けなんか……感じたりなど……しては……ならないのに♡♡♡)

ピュル♡

可愛らしい音を立てて、イッてしまう。相変わらず自分の性器から精液は一滴も出なかったが、体内で自分のイク音が聞こえた。

それに気づいたのか、一回目の射精を終えたはずの触手が再び動き始めた。

「ア、やあ……ッ?! なんて……っ?」

まだマクシミリアンの身体はイッている最中だ。

そんななか動かれたら――

ズクン♡

強力な熱を竿から感じ取った肉ひだが不意に慣れた感触を得た。

さっきまで寝室で嫌というほど味わされたロイドの肉棒の動き。

裏側の竿に浮かんだ凶悪な筋に肉ひだをめくりあげられた感触――それが今この時と同じ場所にあった。

(なんで、あいつと同じ……かたち)

ちらりとロイドを見下ろすと、彼はぼそぼそと魔術の詠唱を行っていた。

「あ。バレちゃいました？ 僕の精液をスライムに直接送り込んだのですが、陛下

あまりにも気持ちよさそうだったから、言うのも野暮かなと思いましたがね」

茶目っ気たっぷりに言われた一言に怒ればいいやら、なじればいいやら、分からない。

ただ年下の彼に良いように手のひらの上で転がされ、辱められたことだけは事実だった。

「貴様、この私を騙すなど、恥を知れ！ この下郎！」

「陛下も気持ちよさそうでしたから、おあいこでしょう。それにまだ抜かずの二発目終わってませんから、ねっ」

どちゅん!!!!

再び竿が動きはじめ肉ひだをねぶってくる。今度は前立腺を亀頭でしつこく小突きまわされる。

「ひっ……やア♡　そこ、グリグリするのは、駄目だと言って……、……♡♡♡♡♡」

「あー。ようやくと可愛い声出てきたじゃないですか。そのままスライムに尿道もいじってもらいましょうね」

ちゅるん♡

愛くるしい音とともに萎えたおちんちんのナカに一本の極細の触手が尿道に入り

込んでくる。

スルスルと侵入した触手は半分まで入ったところで、ぐるりと半回転した。

「~~~~ッ♡♡♡」

声にならぬ悲鳴が唇から漏れた。

脳天を痺れさせるような快楽を体に打ち込まれ、全身が痙攣しかかる。

「おーおー。太ももピクピクしてる。凄いですね。皇帝陛下のメスイキ。でも尿道責めはここからが本番ですから」

あまりの快楽に意識が遠ざかるが、敏感な場所に打ち込まれたソレが気絶を許さなかった。

じゅ…ほ♡じゅほじゅほ♡ほ♡

更に奥へと入り込み、新たな刺激に身体を揺さぶられる。

(もお、無理っ♡ ……、抜け！ 早く抜け…っ！ 抜いて…っ♡♡)

極細触手は前立腺にたどり着き、そのままコツンとつつき始めた。

反対側には太くて熱い肉棒が入っている。

表と裏。

極細触手とロイドの肉棒そっくりの太竿によって交互に前立腺を責められる。

いやそれはもはや責め苦というより嬲られるに近かった。

快楽の暴力を打ち付けられ、マクシミリアンはあられもないよがり声を何度も浴室に響かせた。

広い浴室に自分の声だけが激しく反響し、まるで自慰しているようにも聞こえた。

(いやっ。こんなイキかた……覚えてたら、あと戻りできなくなる……ッ♡♡)

身も夜もなく叫ばされ、身体を弄ばれた。

「あゝ。カワイイ声。聞こえますか？ 陛下のこの甲高い悲鳴。女の子みたいで凄く

可愛い」

「だ、まれ……この屑めっ……、……やっ♡ ア、ア、ア♡ やっ、またイツちゃう」

「イッていいですよ。ほらいけ。いけよ。マクシミリアン」

名前を呼び捨てにされ、部下に命じられるまま、マクシミリアンはイッた。

一際きつく体内が収縮すると、熱いものがぶちまけられた。

(ロイドの精液……っ♡　　すぐく、温かいっ♡♡)

一滴残らず搾り取って、その感触を体内で味わったままマクシミリアンもイく。

「——っ♡　　〜っ♡♡　　いっしょに、ロイド……っ！　　イクうう——ウウ♡♡♡」

ピュルル♡♡

愛くるしい音を立てて、マクシミリアンも果てた。

快樂の海に溺れる心地良さにほう、と官能的なため息を漏らした。

途方もない気持ちよさだけが身体に残り続けた。

浴室で気絶したあと、マクシミリアンの身体はきれいに清められ、寝間着を着せられていた。いつも使っていた寝室は一回目の検査で無惨な有り様となったせいで、その夜は別の部屋で眠りに就いた。

去り際にロイドがなにか囁いた気がするが、初めての快樂に頭がぼんやりとしていたせいか、ハッキリと思ひ出せない。

ただこれほどの体験をしたのだ。もう当分は何も言つてこないだろう。

そう思つて、眠りについた。

翌朝、ロイドは紙切れ一枚残して、医務官たちが働く検査棟に戻っていた。

——検査結果は一週間後に玉座の間にて——

簡潔な書き置きが医務官らしい。マクシミリアンはメモをすぐさま焼き捨てた。

彼との一夜を思ひ出させるものは何一つ、手元に置いておきたくなかつたからだ。

それから一週間、マクシミリアンは政務に専念できる——はずだった。

(いったい何なのだ……！　このむず痒い感覚は……！)

朝の政務にろくに集中できない。

あの検査からたった二日だ。それだけで身体が例えようもなく、アレを求めていく。

あのロイドの肉棒で激しく穿たれた穴をうめてくれるモノを身体が本能的に求めてしまっているのだ。

しかしだからといってロイドをすぐ呼びつけたくはなかった。そんなことをすれば彼の検査に屈したも同じだった。

そんなことはマクシミリアンにとって耐えがたい。

どうにかしないといけない。

決裁書類の文字を追う目がつい泳いでしまう。どうかしてこの身体の疼きを抑えたい。

マクシミリアンは執務室の机上で煩惱を振り払うように頭を揺らした。

（身体を動かしていけないからこんなはしたない事を考えるのだ。馬にでも乗ればきつと収まる……！）

「陛下。どうかなされましたか」

秘書官が心配そうに尋ねてくる。

よく気をつく男だが、今はその気遣いが厭わしい。

「何でもない。少し気晴らしにルネに会ってくる」

「かしこまりました」

秘書官にあとを任せて、執務室を出た。向かう先は厩舎だ。

ルネとはマクシミリアンの愛馬の名だ。

戦場をとにも駆けずり回った戦友であり、父から譲り受けた白い駿馬である。

仔馬の頃からよく面倒を見ていたせいか、マクシミリアンの前では普段の暴れ馬ぶりが嘘のように穏やかな馬だった。

ほかの馬の匂いを少しでもつけていくと乗せてくれないという、なかなか気難しい愛馬でもある。

鞍もあぶみもつけず、裸馬のまま彼と遠乗りするのがマクシミリアンの楽しみだったが、皇帝となった今では落馬を心配されて、それも簡単にはできない。

(そういえばルネにもそろそろつがいを迎えるようにせねば……)

つがい、という言葉に先日のロイドとの一夜がいやでも思い出させられた。

(全くあの男、ろくなことをせぬ！)

しかし宮廷医務官のなかでは文句なしの腕前と聞く。皇帝の権力をもってすれば簡単にクビにすることもできるが、国内がようやく安定してきたのだ。

いつときの感情に任せた判断は、マクシミリアンは嫌っていた

それに腕が良いということは、それによって他の者が助かっているという意味で

もある。

噂ではロイドが考案した薬はいくつも実用化されており、今年は例年と比べて流
感に罹かかる者も少ないと聞く。

そんな有能な男を簡単に手放しては、己の度量の狭さを知らしめるようなものだ。

(検査結果を聞いたあとは、他の医務官に今後は命じれば良い。それだけだ)

マクシミリアンはいつもの冷静さを取り戻すと、厩舎へと続く回廊を軽やかな足
取りで進んでいった。

半刻も歩くと、柱廊が終わり見慣れた厩舎の屋根が見えた。

馬たちの嘶いななきが聞こえてくる。

世話を終えた馬丁が騎士たちと話し込んでるのが見えた。

マクシミリアンの姿を初めて見る新入りの馬丁がとっさに居住まいを正すのが見
えた。

「こ、皇帝陛下……っ!?」

目をまん丸に見開いた少年をなだめるように、そばに立っていた騎士が少年の背を叩く。

「安心しろ。陛下の玉のように綺麗な体を見てもお前の目はつぶれないから」

けらけらと笑う騎士の言葉は本来なら不敬極まりないセリフだが、相手が乳兄弟となると話は別だ。

「相変わず若い少年をいたぶるのが趣味か？ 我が乳兄弟どのは」

「なんだよ。まだ十五年前の話を根に持つてるのか？ ありゃあ、お袋がお前に掛かりつきりだったのが気に入らなくて、少し小突いただけだろう？」

「そのあと取っ組み合いの喧嘩になって私が勝ったがな。ジェイコブ騎士団長」

「ああん？」

ジェイコブが不機嫌そうに目を細めて、眉をしかめた。この顔を浮かべるとさっきまで落ち着き払った三十路前の男が一気に悪ガキのように見えるから不思議だ。

「あの喧嘩はオレが勝ったんだよ。お姫さま」

「ふん。昔の呼び方で呼べば私が激高するとも思ったか？　これだから田舎出の山猿は困る」

「いや。俺が勝ってたね」

「貴様は最後に地べたに手をついていたではないか。だから勝ったのは私だ」

ジェイコブと言っている馬丁の少年はますます目を丸くしていく。皇帝陛下と騎士団長の犬も食わぬ夫婦げんかに次第に少年の緊張がほぐれていき、くすくすと笑い始めた。

「す、すみません！　まさかジェイコブ騎士団長と陛下がそんなに仲が良かったとは知らなくて、ぼく」

「いやガキの頃にした喧嘩の話してるんだから、仲は良くないだろ？」

「喧嘩は私が勝ったしな」

「まだ言うか！」

朝の訓練を終えたばかりの汗臭い身体でジェイコブがじゃれついてくる。それを適当にあしらう姿は夏の離宮に務める者たちの間では見慣れた光景だった。

ジェイコブとの付き合いは長い。

彼の母がマクシミリアンの乳母だった事もあるが、とうとう宮廷で暮らすことが難しくなった時、乳母である彼女の故郷へ一時的に身を寄せることになった。

その時はじめてジェイコブと出会ったのだ。

長年戻って来なかった母が見知らぬ少年を連れて帰郷した。それだけでもジェイコブには驚きだったのに、さらに今度は他の大人たちまでマクシミリアンを手厚くもてなす姿にいい気はしなかった。

取っ組み合いの喧嘩になるのは必然だった。

（あの喧嘩は生まれて初めての戦いだっただけ……）

今まで宮廷にいた敵は皆、言葉で真意や本音を隠すものたちばかりで、言い返そうとしても戦いにもならなかった。

ひるがえってジェイコブは敵意をむき出しにして、迫ってきた。それが幼いマクシミリアンにとつては大層新鮮で、痛快だった。生まれて初めて反撃する機会を与えられた気がした。

ジェイコブにとつても、金髪碧眼の愛らしい『お姫さま』が何度も立ち向かつてくる姿は、意外だったのだろう。あの喧嘩以来、唯一無二の友人となった。

身分の違いはあれど、それを盾にしたことは一度もない。

戦場ではたびたび彼に命を救われたし、自分も救ってきた。きつとこれからもそうだろう。

「それでルネはいるか？」

愛馬の様子を訊くと、とたんにジェイコブはつむじを曲げた。

「ちっ。まゝたあの暴れ馬にじゃれつきにきたのか」

「私の前では素直でいい奴だぞ」

「そういうのをネコかぶってるって言うんだよ。俺が顔見せたらもうひどいのなん

の。ルネが女だったらお前と相思相愛で最高だったのにな」

ジェイコブが両肩をすくめて天を仰ぎつつ、厩舎の中へと迎え入れてくれる。

干し草の香りや忙しなく働く男たちの汗と馬たちの匂いで、いつも独特の匂いを放っていた。

「言っておくがルネはオスだし、そろそろつがいも見つけてやらねばならん。ジェイコブ、いい馬を知らないか？」

「それを言うならお前だろう？」

馬丁たちは慣れた手つきで手早く仕事を済ませると、厩舎から出ていった。

ちやうどマクシミリアンが愛馬を見に来る時間が彼らの休憩時間みたいなものだ。

皇帝陛下のお気に入りの時間を邪魔する輩はいない。

今朝はジェイコブというオマケがひとりついてきているが。

「……私のことはいい。今はルネの話をしている」

だがジェイコブは簡単に引き下がらなかった。子どもの頃の悪ガキそのままの顔

で、声を潜めて聞いてくる。

「だって噂で聞いたぞ。例の検査をようやく受けたって」

精子検査——

そのひと言を聞いた瞬間、マクシミリアンの身体は火照りを覚えた。

ロイドの指でいじめ抜かれ、さらにはスライムによって未知の快楽を覚え込まされたあの夜。

あの快楽を知った今、普通の男女の営みは遠いものに思えてならない。

(駄目だ。思い出すな……)

厩舎は離宮ほど広くはない。このままではあつという間にルネの馬房に着いてしまふ。

浅ましい欲望のたまった身体で愛馬にふれたくはなかった。

隣でジェイコブが気にせずに続ける。

「お前もとうとうお妃を迎える気になったってところか。いや《花の儀》になる可

能性もあるか。まあ、どっちにしろめでたい事だよな」

「……ジェイコブ！」

思い出させるなどばかりに声を上げると、ジェイコブが驚いて降参のポーズをとる。

「悪かった。そんな怒るなよ。安易に口にして悪かったよ」

——《花の儀》。

古来より帝国に密かに伝わる儀式で、帝室に男児が生まれた際、成人後に子を産める身体に替える秘術と言われる。

帝室の血が絶えかけた時にのみ行われる秘儀で数百年は行われなかったが、ここに来て帝室の生き残りはマクシミリアン一人きりだ。

貴族達に降嫁した姫君の血筋もここ最近の反乱続きで、多くが途絶えている。

(まさかそれを見越してあの男あんな検査を……?)

馬房へ向かう道中考え込んでみると、ジェイコブが顔を覗きこんできた。

頭一つ高い彼にはいつもこうやって見下ろされてしまう。

子どもの頃のままだ。

「なんだ……?」

「とうとう年貢の納め時が来た乳兄弟どのを眺めるのは楽しいと思つてな」

「お前とて、貴族の令嬢たちからたくさん恋文をもらつてしていると聞くぞ」

皇帝の乳兄弟であり、長年続いた反乱を平定に導いた騎士団長だ。

モテないはずがない。

クセの強い焦げ茶の髪に愛嬌のあるたれ目、筋骨隆々の引き締まった身体を持つ男となれば女たちが放っておくはずがない。

「なあに俺はこのまま娼館通いを続けながら、のんびり身の丈に合った女を探すさ。血統だの地位や権力には興味がない。まあ、お袋に孫の顔を見せたいとは思うがな。そんなもんだ」

あつげらんとした物言いに心がなごんだ。

相変わらずこの男は自分の本心を隠すということをしなない。

出会った頃と変わらずあけすけで、さっぱりとした気持ちの良い男だ。だからつい漏らしてしまった。

「もしも私が《花の儀》を迎えることになったら、お前の子種でももらうかな。そうすれば後腐れあしくさがなくていい」

たわいない冗談で終わるはずだったが、ジェイコブに肩を掴まれた。

暖かい暖炉の薪を思わせるような瞳が自分を一心に見つめてくる。

「それ本当か？」

じっと見つめ込まれて、心臓が妙な高鳴りを覚える。いつもよりジェイコブの手が熱い。引き抜こうとしたが、現役騎士団長の握力には勝てなかった。

「——っ。じよ、冗談に決まっている……ッ」

「嘘だ」

「今のはただの言葉のあやで——ッ」
気づくと抱き寄せられていた。頬にジェイコブのぶ厚い胸板が当たり、彼の心音がどくどくと脈打っているのが伝わった。

戦場で何度も傷ついた身体を抱き上げられたことはある。

けれどあれは戦いのさなかでの出来事で、いつも耳をつんざく雄叫びや大地を揺らす馬蹄の音がひしめいていたから、ここまではつきりと聞こえることは無かった。

「例の検査結果でお前が《花の儀》を迎えるかもしれない事が決まるんだろう？」
「まだそうとは決まって……」

「他の男から種をもらう位なら俺がお前の初めてを——」

そう言われた瞬間、マクシミリアンは頭に冷や水を浴びせられた心地がした。

男の子種を受けていないといえは嘘になる。

数日前、ロイドから嫌と言うほど子種汁を浴びせられた。

あんな劣情を催すだけの検査など今すぐ忘れたかったが、身体はしっかりと覚え

ていた。ロイドの熱い肉棒にひだをえぐられ、喉が嗄れるほど責め上げられた瞬間を――

熱い種汁を何度もそそがれて、みっともないよがり声を上げたあの夜。もはやジェイコブと目を合わせられなかった。すぐさま顔を伏せる。

視線を交わしたらお互い長い付き合い合いだ。バレるに決まっている。

「マクシミリアン？　おい、まさか……」

ジェイコブの問いかけには答えられなかった、

答えたら最後、彼に知られてしまう。

だがジェイコブに強引に顔を上向かされ、目と目が合わされた。

「男に抱かれたのか……？」

「違うっ。あれは、単なる検査で……っ」

言葉を連ねるたび、あの夜のことが脳裏に迫ってきて自分の痴態が思い浮かぶ。

白い頬がリングゴのように赤く染まり、耳まで熱い。元から肌が白いせいで嫌でも

目立つ。

「抱かれたんだな？」

有無を言わさぬ口調でジェイコブに迫られたら、嘘はつけなかった。

幼い頃出会ってすぐにマクシミリアンが決めたのだ。

死ぬまで彼に嘘はつかないこと、と――

マクシミリアンは睫毛まつげを震わせて目を伏せてから、そっと答えた。

「検査の為だ……」

それでいつものジェイコブなら分かってくれるはずだ。二ヶ月先に生まれた男は二人きりの時だけ見せる兄貴面を浮かべて、そうか仕方ないと言って許してくれる。そのはずだった。

「っ、このっ！」

怒りを帯びた声に殴られると思ったが、肌を刺すような痛みはいつまで経っても

やって来なかった。代わりに腰を抱かれ、唇をきつく奪われた。

口内にジェイコブの肉厚な舌が入り込んでくる。歯をねぶられ、息継ぎするための空気も奪われ、舌を吸われた。

ロイドのねちっこい愛撫とは異なる激しい口づけにマクシミリアンは混乱した。

「うんっっっ♡♡♡」

引き離そうとジェイコブの胸を叩くがびくともしない。そのまま腰を抱いていた手は尻の割れ目に移り、太ももの内側を手のひらでさすってくる。

くねる動きに浴場でのスライムの触手を思い出して腰が震えた。

薄目を開くとジェイコブは冷静な目でこちらを観察していた。

戦場で敵の動向を監視するときにも似た視線で、ぞくりとした。自分が狩りで追い詰められた獲物になっている気がする。そのままジェイコブの股間にすりあわせるように身体を押しつけさせられた。

（……嘘だ。なぜ、私の身体に反応して——）

ジェイコブの股間は大きく盛り上がり、彼が自分の身体に欲情していることは確かだった。そのまま何度も股間同士をこすりあわせられ、マクシミリアンの身体も反応を返してしまふ。

(駄目だ。相手はジェイコブだぞ！　こんな形で……)

彼の胸板を叩いたが、後頭部をがっちりと掴まれては唇を離すこともできない。訓練で汗をかいた男くさい香りが鼻孔に入り込んでくる。幼い頃じゃれあった時に何度も嗅いだことのある匂いだ。だのに今はジェイコブの情欲も相まって、別人の香りに思えた。

それが怖くてたまらない。

「う……んっ♡」

ようやく唇が離れた時には、マクシミリアンは息もたえだえだった。互いの唾液が糸のようにつながり、垂れ落ちた。

ジェイコブは娼館通いで慣れているのか頬を染めてもいない。少しいらついた態

度で迫ってくる。

すねを蹴ってやったが硬いすね当てに覆われた巨体はびくともしなかった。

「こうなったらルネに証人になってもらおうか」

「何を、馬鹿なことを……」

ジェイコブの手から逃れようともがくが、体格差はどうしようもなかった。まだキスの余韻が残っている身体を肩にかつぎ上げられる。そのままルネの馬房に連れて行かれた。

主の姿をみとめた白い愛馬が嬉しげに馬房の中で鼻を鳴らす。

皇帝の愛馬ゆえか、ルネの馬房は他の馬房よりも圧倒的に広く、彼が歩き回れるほど広い円形の馬場が設けられていた。

澄んだ瞳が久しぶりの主の訪問に喜び、しっほを嬉しそうに揺らしている。

愛馬に助けを求めようとした瞬間、担がれたままジェイコブにズボンを下着ごと引きずり下ろされた。尻が外気に当たり、冷たい。

「やつ……！ お前、何を……ッ!?」

「言っただろう？ ルネに見てもらおうって。お前の主がどんな風に男を惹きつけるようになったか」

尻丸出しの状態でジェイコブの大きな手のひらが尻の割れ目にふれてくる。ひんやりとした指に肌が粟立つ。あわだその感触を楽しむようにジェイコブの指が尻肉を持ち上げては、ぞんざいに手で揉んできた。

「手を離せ。ジェイコブ。ルネの前だぞ！」

「ルネも見たいよな。お前の主が男に抱かれてどんな身体になったのか」
くぱあ、とジェイコブに思いつきりアナルを指で広げられる。

愛馬の興奮した息づかいが聞こえてきて、憤死したくなるほど恥ずかしい。アナルに息を吹きかけられ、快楽に弱い身体はつい反応してしまう。

「ふくん。一見すると処女にしか見えないな。このピンクの瑞々みずみずしい入り口。ここ

に精子検査で男の肉棒くわえこんだのか」

じゅほ♡♡

太い指がゆっくりと焦らすように入ってきた。肉ひだのひと筋ひと筋をめぐりあげられて、喉から悲鳴が出かける。

(だめだ……だめだ……絶対に声を上げては……駄目ッ♡♡)

両手で自分の口をふさぐが、ジェイコブは入り口を大きく広げて、悠々と指を出入りさせてくる。

「どこがマクシミリアンのイイところかな？ 手前？ それとも奥？ 一回入れられてるなら反応できるよな？」

頭を左右に振って分からないと答えると、ジェイコブの指が入り口近くの浅い肉ひだを押し始めた。

く……ンにゆ♡くにゆ♡くにゆ♡くにゆ♡

(やっ！ ア——な、ンで、そんなトコッ♡♡)

内ももがピクピクと震えて足を閉じようとするが、ジェイコブの指が移動するたび、痙攣してしまう。

彼の手管に反応していることは明らかだった。

「へえ。ずいぶんとじっくり慣らされたんだな。おいルネ。見てやれよ。お前の主、秘儀を迎える前にもう女の子になっちゃったみたいだぞ」

ジェイコブが一步前に歩くと、尻にルネの荒い鼻息がかかる。ジェイコブの指で広げられたアナルの内側にまでその息は入ってくる。

(や——めろ……それ以上は)

肩に担がれた状態でジェイコブの背中を叩くが効果は無い。

「お前も知りたいよな。ルネ」

愛馬の鼻息がどんどん近づいてくる。すんすんと尻を嗅がれ、もはや主としての尊厳は無に等しかった。

「ほら、味見してやれ」

にゆる——ぷぷぷぷ♡♡♡

ジェイコブの指が引き抜かれると同時に長く分厚い舌がアナルに入り込んできた。あのスライムの触手とも全く異なる馬の舌に身体がさざめく。

肉ひだの一本一本を太い舌で丹念にしゃぶられる。時々体内でうねる動きが、浴槽でのスライムの動きを思い出させる。

(あ、ア、ア、なんでこんな熱い……ッ♡)

じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡れろれる♡♡

「ルネ！ やめなさい。いい子だから……あ、ひんッ♡♡」

「うわ。今の声すっげー腰にきたわ。やっぱり《花の儀》で孕ませたいなあ。お前も俺ので孕みたいだろ？ マクシミリアン」

「ちが——ッ！ 誰がお前の子などっ」

「ひどいな。さっき俺に種付けしてもらいたいか言ってたクセに」

「アレは……！ 種付けではなくっ、お前の子種をもらえればという話で……、

ひい……ウンっ！ 奥、つつくなっ。ルネ……やめなさ——ッ♡♡

ぐ、ぢゅるう♡♡

熱い舌先があので一気に敏感になった前立腺に吸い付いた。何度も舌先が行ったり来たりして、ぷつくりとふくらみきった前立腺をなぶる。

愛馬にしゃぶられた肉ひだは熟れきって、愛液を漏らしはじめる。本当なら起きるはずのない反応が身体に現われ、それがまたルネの愛撫を再開させてしまう。

「へえ。ちんちんおたててすごい反応じゃん。一回抱かれただけでこれほどってなると、例の医務官よっぽど検査の腕が良かったのか？」

「ち、がう……」

「スライムの交配研究で有名になった男だもんな。ま、お前のことだから腕の良さで選んだんだろうが、なあ、奴のスライムにどこまでやられた？」

「っ……言いたくない」

口が裂けても言える内容ではなかった。